

31 関連性理論に基づく発話解釈 ——明意と推論

関連性理論では、話し手が伝達しようと意図した明示的意味を、明意 (explicature) と言う。明意は、発話の複合化 (decoding) と関連性の原理に基づいた推論の組み合わせによって復元される完全な命題と定義され、この推論には4つの作業が含まれるが、本項ではそのプロセスについて考える。(1)を見てみよう。

(1) a. He went to the bank.

b. Flying planes can be dangerous.

c. I met her the previous day, just here. (Allot 2010: 6)

まず、(1a)におけるbankの意味は「銀行」とも「土手」とも解釈できるという点で不明確である。(1b)では、flyingを現在分詞と考え「飛んでいる飛行機」と解釈するか、動名詞と考え「飛行機を飛ばすこと」と解釈するかにより、2通りの解釈が可能である。このように複数の解釈が可能な場合、一義的解釈を得られない限り、明意を理解したとは言えない。しかし、ここにあるコンテキストが与えられれば、そのコンテキストに見合う、関連性のある解釈を求め、適切な1つの意味が導かれる。この推論作業を**曖昧性の除去 (disambiguation)**という。

(1c)における明意を導くためには、主語が指示する対象を明確にする必要があるが、指示対象を明確化する作業を指示対象付与と言う。また、ある発話において存在する空所に、コンテキストから値を補う作業を**飽和 (saturation)**という。具体例を挙げると、Would you like to have some more wine?とワインを薦めた時、I've had enough.と相手から返答されたとする。この場合、Iに指示対象付与する作業、hadの目的語としてwine (値)を補う作業が飽和にあたる。

また、I've had enough.にtonightを補い「今夜は十分にワインをいただきました」と関連性が得られるところまで解釈を復元し、発話を限定していく作業を**自由拡充 (free enrichment)**という。(1c)において、the previous day (時)を明確化する作業も自由拡充にあたる。

飽和は言語表現が求める要素を補うために行われるのに対し、自由拡充は、語用論的な理由(関連性のある解釈を得るため)のみによって行われる。この点で、この両者(飽和と自由拡充)は異なる。

関連性理論では語レベルでの推論作業も明意の解釈に関わる。具体的には、記号化された概念を縮小して解釈する語彙概念の狭め (lexical narrowing) と、拡張して解釈する語彙概念の緩め (lexical broadening) とがある。具体的に言うと、前者は符号化された意味よりも特定のな(狭められた)意味で使用された結果、言語

的に指定された内容よりも縮小された意味を指示することであり、後者は、符号化された概念のカテゴリーに収まらない場合、適切な意味解釈が得られるまで当の語の意味を拡張して用いることを言う。そしてこれらの語用論のプロセスを**アドホック概念構築 (ad hoc concept construction)**と呼ぶ。以下はその具体例である。

- (2) a. The steak at the restaurant was raw.
- b. Their garden is rectangle.
- c. Our dog understands language. (内田 2013: 48)

(2a)におけるrawは、文字通り「生」という意味ではなく、ここでは「食べるには十分に火が通っていない」という意味である。(2b)におけるrectangleは、庭の角が正確に直角を成しているという意味ではない。(2c)は、犬が飼い主の指示を理解できると解釈すべきであり、人間と同等の言語能力を持つという意味ではない。これらは概略表現 (approximation) であり、語彙概念の緩めの例である。次に (3) を見てみよう。

- (3) a. Mary is looking for a bachelor.
- b. You have a fever. Go see the doctor right now.
- c. I was tired and we went out for dinner. (ibid.: 49)

(3a)でのbachelorはコンテキストに見合う意味に絞り込み、「結婚相手として相応しい男性」と解釈すべきである。(3b)でのfeverは医師の診察を受けなければならないほどの「高熱」と解釈すべきであり、(3c)でのtiredは、外食には出かけられる程度の「疲労」と解釈すべきである。ここに挙げた例は、語が持つ意味を絞り込む、語彙概念の狭めの例である。語彙概念の緩め、語彙概念の狭めは、聞き手が関連性を求めるがゆえ行われる。アドホック概念について特筆すべき点は、これまで個別の表現方法として扱われてきた文字通りの意味、概略表現、誇張法、メタファーについて統一的な説明が可能になることである。

(洪沢 優介)